



萩原広道『源氏物語評釈』初版八冊本から十三冊本
へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005070

萩原広道『源氏物語評釈』初版八冊本から十三冊本へ

青木 賜鶴子

大阪府立大学学術情報センター図書館は、本学の前身である府立大阪女子大学時代からの貴重書を引き継いで所蔵しており、女子大時代のおもな貴重書は『大阪女子大学附属図書館所蔵 和漢書分類目録』に概略が紹介されている。しかし、目録以降に収蔵したものもあり、すべての貴重書が記載されているわけではない。

萩原広道『源氏物語評釈』について言えば、現在は八冊本二種、十三冊本三種、合計五種の版を所蔵しているのだが、前記『和漢書分類目録』に載るのは四種であり、八冊本は残欠として扱われている。ただし、各種辞書・目録類でも八冊本と十三冊本は明確に区別されておらず、八冊本の存在はほとんど知られていなかったと思われる（なお、他の図書館の目録でも八冊本は残欠扱いの場合が多い）。

本稿では、前記『和漢書分類目録』の追補を兼ねて、本学所

萩原広道『源氏物語評釈』初版八冊本から十三冊本へ

蔵の版本五種について報告しておくことにする。この中には、初版とおぼしい八冊本と、十三冊本最終の松村九兵衛版が含まれるので、これによつて、八冊本から十三冊本に至る過程の一端が明らかになるであろう。

一 八冊本と十三冊本

『源氏物語評釈』の八冊本は、「首上(序・惣論上)」「首下(惣論下・凡例)」「桐壺」「帚木」「空蟬」「夕顔」「語釈一」「余釈一」より成り、十三冊本は、これに「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「花宴」「語釈二」(「語釈一」と合冊)「余釈二」を加えたものである。

八冊本、十三冊本とも、第六冊の「夕顔」巻末に「嘉永六年癸丑新刻／鹿鳴草舎蔵板」の刊記を持ち、序に「嘉永七年正月三日 萩原広道」とあるので、まず夕顔巻までの八冊本が嘉永

七年（一八五四）に広道蔵板本（自費出版）の形で刊行されたことがわかる。この間の事情については、広道の書簡が紹介されたこともあり、かなり明らかになってきている。⁽²⁾

十三冊本の「語釈 二ノ端」に、

この六年あまりかほと中風にて手をやみたりければ板下をかく事たにえせず 源氏の評釈たえむとする事いとうれはしくかなしかりけり これによりてさきに彫せつるちうさくをものして まつかくなん五巻の草紙とはなしたる 語釈をも別にせんとおもひしかと はつかばかりのほとなれは ついてにこゝにとちそへつ 次の巻々よりは人の手にかゝしめたれはいたうかはりたるになん

文久のはしめの年なか月 さなからに広道しるすどあり、七年後の文久元年（一八六一）九月、病のため版下が書けない中、花宴巻まで五巻の原稿を加えたこと、「語釈二」は分量が少ないので「語釈一」と合冊としたことがわかる。こうして十三冊の評釈を出したが、二年後に広道は歿してしまう。当初計画した全七十冊の『源氏物語評釈』は、ついに完成することとはなかつたのである。

森川彰氏・多治比郁夫氏『源氏物語評釈』の出版事情―河内屋茂兵衛あて萩原広道書簡⁽³⁾は、初版の特徴として、

板本調査は十分でないが、所見本のみについていえば、藤花模様表紙、「夕顔」巻末に「嘉永六年癸丑新刻／鹿鳴草舎蔵板」印（朱印）とあるのが初版である。同じ表紙で印記を欠き、「発行書林」の連名を載せる版もあるが、すべて「余釈」の四〇ウ・四一オに朱墨二色刷の「中河の家の図」を載せる。群鶴模様表紙をもつ版では「惣論上（首上）」の見返しに「萩原先生著 初帙八冊／校正源氏物語評釈／鹿鳴草舎塾蔵」の刻があるが、「余釈」の「中河の家の図」を欠き、このところ柱の丁付けを「四十ノ四十一」と改刻する。

と指摘している。「柱の丁付けを「四十ノ四十一」と改刻するのは十三冊本であり、後に述べるように、柱だけでなく「四十ノ四十一」の丁全体を改刻したと考えられる。

二 本学所蔵の版本

本学学術情報センター図書館はこの初版を含む五種の版を所蔵している。すべて「夕顔」巻末に「嘉永六年癸丑新刻／鹿鳴草舎蔵板」の刊記を持つが、「夕顔」裏表紙見返しまたは「余釈二」裏表紙見返しに刊記を持つものがあるので、以下に刊記を中心に概要を記しておく。なお初版の特徴である「夕顔」巻末

刊記の広道朱印「鹿鳴草舎」の有無と、「余釈」四〇ウ・四一オの朱・墨二色刷りの「中河の家の図」の有無を併記する。

イ 八冊本 1

「夕顔」巻末刊記に朱印有。「余釈」図有。他刊記無。八冊。初版とおぼしい。

ロ 八冊本 2 (伊丹屋版)

「夕顔」巻末刊記に朱印無。「余釈」図有。八冊。

「夕顔」裏表紙見返し刊記「発行書林／江戸日本橋通老丁目須原屋茂兵衛／同浅草茅町二丁目 須原屋伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同本石町十軒店 英大助／同芝神明前 岡田屋嘉七／京都三条通升屋町 出雲寺文次郎／肥前佐賀白山町 紙屋惣右衛門／大坂南久宝寺町 榎並屋小兵衛／同心斎橋備後町 近江屋平助／同心斎橋通南久宝寺町 伊丹屋善兵衛」

ハ 十三冊本 1

「夕顔」巻末刊記に朱印有。「余釈」図有。他刊記無。「桐壺」
「語釈」欠。十一冊。

ニ 十三冊本 2 (前川版)

「夕顔」巻末刊記に朱印無。「余釈」図無。「語釈一」「語釈二」を一冊とせず。「語釈二」は「余釈二」と合冊にする。十三

冊。「首上」と「若紫」見返し(朱地)に「萩原先生著 初峽八冊(二帙五冊) / 校正源氏物語評釈 / 鹿鳴草舎塾藏」とある。

「余釈」裏表紙見返し刊記「皇漢洋今古書類自家積年発兌セ
ル者ト其集 / 蔵書ニ充棟載車ノ夥キノミナラス品位精工價 /
程清廉以テ四方ノ君子ノ愛顧ヲ待ツ / 文栄堂藏版 / 東区南久
宝寺町四丁目十九番屋敷 / 阪府書林 前川善兵衛」

ホ 十三冊本 3 (松村版)

「夕顔」巻末刊記に朱印無。「余釈」図無。十三冊。「首上」と
「若紫」見返し(朱地)に「萩原先生著 初峽八冊(二帙五冊)
 / 校正源氏物語評釈 / 鹿鳴草舎塾藏」とある。

「余釈」裏表紙見返し刊記「東京 吉川半七 / 同 大倉孫兵衛 / 同 小林喜右衛門 / 同 林平治郎 / 西京 佐々木惣四郎 / 同 福井源治郎 / 同 若林茂一郎 / 同 松田正助 / 大阪市東区南本町四丁目五十番屋敷 森本専助 / 大阪市南区心斎橋筋一丁目六十七番屋敷 松村九兵衛」

巻末の「別表1」は、以上五種の匡郭の寸法を示したものである。参考のため本学が所蔵する版本の寸法を併記した。計測時の誤差もあると思うが、縦の長さに約一ミリ前後の差が見られ、ほぼイからホの順に少しずつ縮んでいることから、イから

本の順に刊行されたと推測される。

さらに、「匡郭に欠けが見られる場合は、「図1」に示したように、ほぼイからホの順に欠けているようである。

また、本学所蔵の版木は、ホの版元である松村家（敦賀屋）から寄贈された経緯があるので、明治初期に刊行されたホが最終版とわかる。

ハは、十三冊本でありながら初版の特徴である「夕顔」巻末の朱印と「中河の家の図」を持ち、十三冊本の最初の版である可能性と、取り合わせ本である可能性の両方が考えられる。ただし表紙等の装丁はどの冊も同一のようである。さらに諸本の調査が必要であろう。

ロの版元の一人伊丹屋善兵衛（前川善兵衛）は、後に単独でニを出しているので、実質的な版元であろう。またロの版元のうち、江戸の須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛・岡田屋嘉七等は、江戸での売出担当なのである。

このほか、伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史辞典』（東京堂出版、二〇〇一年）に紹介されているもののうち、巻末に「讃州高松 本屋茂兵衛／阿州徳島 天満屋武兵衛／発行 淡州須本 久和志満屋文蔵／加州金沢 近岡屋太兵衛／越中富山 上市屋卯助／勢州 津 篠田伊十郎／尾州名古屋 美濃屋伊八／

萩原広道『源氏物語評釈』初版八冊本から十三冊本へ

西京 銭屋惣四郎／同 丁子屋茂兵衛／東京 須原屋茂兵衛／同 山城屋佐兵衛／大坂 敦賀屋九兵衛梓」の刊記を持つものがあり、おそらくこれがホの松村版の直前の版なのである。

三 十三冊本の改刻

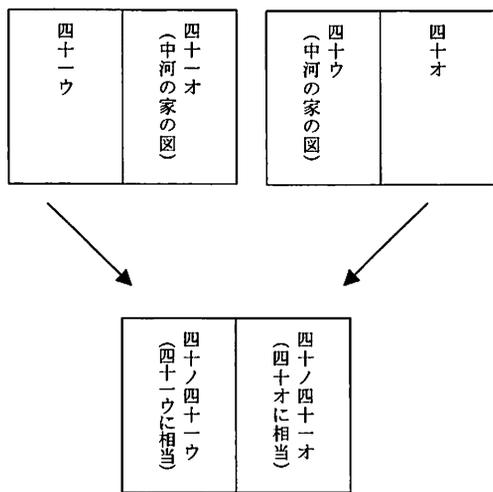
十三冊本は、ほぼすべての版木を八冊本のまま使ったと見られるが、「余釈」第四〇・四二丁のみ、「中河の家の図」のない十三冊本では丁全体が改刻されたと考えられる。

図のない十三冊本「四十ノ四十一」は、八冊本の四〇才、四一ウに相当するが、匡郭の縦の長さは、「別表2」に示したように、八冊本では、四〇才が二一・七センチ、四一ウが二一・六〇二一・七センチであるのに対して、図のない版の「四十ノ四十一」は、才が二一・四センチ、ウが二一・三センチと、およそ三ミリ短くなっている。他の丁では、初版との差は一ミリ前後であり、「四十ノ四十一」のみ、大幅に短くなっていることがわかる。

また、版面を詳細に比較してみると、たとえば、才の二行目「御かた」、七行目「其外に」「東」「格子」、ウの四行目「詞に」の「に」、「わびて」、七行目「又ひろげては」「風の」「源氏」などの字形が微妙に異なっている（図2）（図5）参照。し

たがって、この丁は被せ彫りによつて改刻されたと推測される。

このことは、版面を想像してみるとわかりやすい。初版では、四〇才・四〇ウ(図)で一面、四一才(図)・四一ウで一面の版木を使ったはずであるが(このほかに朱色刷りのため一面乃至二面の版木が必要である)、図を入れず四〇才・四一ウで一丁とするなら、元の版木からであれば文字の部分のみ半丁ずつ摺らねばならないことになり、摺る手間が倍増する。それならば、新たに一枚の版木に彫り直す方が効率的であろう(図6)参照。



【図6】

このように、十三冊本の「余釈四十ノ四十一」は、柱だけでなく丁全体が改刻されたと考えられるのである。

以上、本学所蔵の五種の『源氏物語評釈』について報告するとともに、八冊本から十三冊本に至る過程の一端を明らかにした。今後さらに諸本を調査したうえで改めて考察したい。

注

- (1) 『増訂版 国書総目録』第三卷(岩波書店、一九九〇年)、『古典籍総合目録—国書総目録統編』第一卷(国文学研究資料館編、岩波書店、一九九〇年)、『源氏物語事典』下巻(池田亀鑑編、東京堂、一九六〇年)、『日本古典文学大辞典』第二卷(岩波書店、一九八四年)、伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史辞典』(東京堂出版、二〇〇一年)等。
- (2) 森川彰氏『源氏物語評釈』の出版—広道書簡—(『混沌』五号、一九七八年九月)、森川彰氏・多治比郁夫氏『源氏物語評釈』の出版事情—河内屋茂兵衛あて萩原広道書簡—(『大阪府立図書館紀要』二五号、一九八九年三月)。
- (3) 参照。
- (4) 本学所蔵の版本については、「萩原広道『源氏物語評釈』の版本と出版」(『上方文化研究センター年報』第十号、二〇〇九年三月)に報告した。

(あおき しゅん・本学准教授)

夕顔54才	ウ	二二・〇×一五・六	二二・〇×一五・五	二二・九×一五・五	二二・〇×一五・六	二二・九×一五・五	二二・九×一五・五	二二・七×一五・七
夕顔53才	ウ	二二・九五×一五・六	二二・九×一五・五	二二・八五×一五・五	二二・〇×一五・六	二二・九×一五・六	二二・八五×一五・五	二二・八×一五・七
夕顔52才	ウ	二二・〇×一五・六五	二二・〇×一五・六	二二・九×一五・七	二二・〇×一五・六五	二二・九×一五・七	二二・八五×一五・六	二二・七×一五・八
夕顔51才	ウ	二二・〇×一五・八	二二・九五×一五・七	二二・九×一五・六	二二・〇×一五・七	二二・八五×一五・七	二二・八五×一五・六	二二・八×一五・七
空蟬1才	ウ	二二・六×一五・六	二二・六×一五・五	二二・六×一五・五	二二・五五×一五・六	二二・五五×一五・五	二二・六×一五・五	二二・三×一五・七
帯木64才	ウ	二二・七×一五・八	二二・七×一五・七	二二・六×一五・七	二二・七×一五・六五	二二・七×一五・六	二二・五五×一五・七	二二・三×一五・八
帯木63才	ウ	二二・七×一五・六	二二・七×一五・五	二二・六×一五・七	二二・六×一五・五	二二・六五×一五・七	二二・七五×一五・八	二二・四×一五・八
帯木55才	ウ	二二・八×一五・八	二二・八×一五・七	二二・八×一五・七	二二・七五×一五・七	二二・七五×一五・六	二二・四×一五・七	二二・四×一五・七
帯木54才	ウ	二二・七×一五・六	二二・七×一五・六	二二・七×一五・七	二二・六×一五・五	二二・七五×一五・七	二二・七五×一五・五	二二・三×一五・七
帯木47才	ウ	二二・四×一五・八	二二・三×一五・七	二二・四×一五・七	二二・四×一五・七	二二・三×一五・七	二二・八×一五・七	二二・五×一五・八
帯木46才	ウ	二二・四×一五・六五	二二・四×一五・四	二二・四×一五・五	二二・三×一五・七	二二・三×一五・五	二二・三×一五・七	二二・〇×一五・七
帯木45才	ウ	二二・六×一五・七	二二・五×一五・六	二二・五×一五・七	二二・六×一五・五	二二・五×一五・五	二二・六×一五・五	二二・〇×一五・八
帯木44才	ウ	二二・六×一五・七	二二・六×一五・七	二二・六×一五・七	二二・五×一五・五	二二・五×一五・五	二二・六×一五・五	二二・一×一五・八
丁	イ 八冊本1	二二・六×一五・七	二二・六×一五・七	二二・六×一五・七	二二・五五×一五・六	二二・五五×一五・五	二二・五五×一五・五	二二・三×一五・八
	ロ 八冊本2	二二・六×一五・七	二二・六×一五・五	二二・六×一五・五	二二・五×一五・五	二二・五×一五・五	二二・五×一五・五	二二・三×一五・六
	ハ 十三冊本1	二二・六×一五・七	二二・六×一五・七	二二・六×一五・七	二二・五×一五・七	二二・五×一五・七	二二・五×一五・七	二二・三×一五・八
	ニ 十三冊本2	二二・五五×一五・六	二二・五五×一五・六	二二・五五×一五・六	二二・六×一五・五	二二・六×一五・五	二二・六×一五・五	二二・四×一五・八
	ホ 十三冊本3	二二・五五×一五・七	二二・五五×一五・七	二二・五五×一五・七	二二・五×一五・五	二二・五×一五・五	二二・五×一五・五	二二・三×一五・六
	板木	二二・三×一五・八	二二・三×一五・八	二二・三×一五・八	二二・四×一五・七	二二・四×一五・七	二二・四×一五・七	二二・四×一五・七

余積一47才 ウ	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・三	二二・一〇×一五・三	二二・一〇×一五・三	二二・一〇×一五・三	二二・一〇×一五・三
余積一48才 ウ	二二・一〇×一五・五	二二・一〇×一五・五	二二・一〇×一五・五	二二・一〇×一五・五	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四	二二・一〇×一五・四
余積一49才 ウ	二二・一〇×一五・三								
余積一50才 ウ	二二・一〇×一五・四								
丁	イ 八冊本1	ロ 八冊本2	ハ 十三冊本1	ニ 十三冊本2	ホ 十三冊本3	板木			

〔別表2〕 「余積」 第四〇・四二丁の匡郭寸法 (縦×横 単位^{cm})

余積四〇才	二二・七×一五・六	二二・七×一五・五	二二・七×一五・五	二二・七×一五・五	二二・七×一五・三	二二・四×一五・三	二二・四×一五・三	二二・四×一五・三	二二・四×一五・三
余積四〇ウ (四)	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四
余積四一才 (四)	二二・八×一五・五	二二・七五×一五・五	二二・八×一五・五						
余積四二ウ	二二・七×一五・五	二二・六×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・四	二二・七×一五・三	二二・三×一五・三	二二・三×一五・三	二二・三×一五・三	二二・三×一五・三
丁	イ 八冊本1	ロ 八冊本2	ハ 十三冊本1	ニ 十三冊本2	ホ 十三冊本3				